Osaka University Knowledge Archive

Title	明治のプラウトゥス : 相良常雄『雙児の邂逅』について
Author(s)	五之治, 昌比呂
Citation	日本語・日本文化. 2006, 32, p. 1-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5335
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

＜研究論文＞

明治のプラウトゥス
――相良常雄『雙児の邂逅』について――

五之治　昌比呂

はじめに

最初に日本語に翻訳されたギリシア・ローマ文学の作品は何か。筆者のような西洋古典学を研究する者なら一度は頭に浮かぶ疑問ではないだろうか。キリシタン時代は考慮外とし、イソップ寓話などの断片的な翻訳を別にすると、作品全体が翻訳されて活字になった最初のものは、ホメロスでもギリシア悲劇でもなく、ローマの喜劇詩人プラウトゥスの作品である。訳されたのは彼の喜劇『メナエクムス兄弟』であり、訳者の名は相良常雄、邦題は『滑稽狂言　雙児の邂逅』（おどけきょうげん　ふたごのであい、明治21年5月刊）という[1]。当然ながら原典はラテン語で書かれているが、後で述べるように相良の翻訳は英語訳からの重訳である。とはいえ、ある程度の長さの古典作品が丸ごと翻訳されるというのは明治時代全体を見渡してもほとんど例が見つからないので、それを考えれば『雙児の邂逅』の出版は特筆すべき事例だと言える。

Ⅰ　相良常雄という人物について

訳者の相良常雄とは何者であろうか。少なくとも現在、文学史からは完全に忘れ去られた人物である。最初にこの人物について筆者が調べ得た限りのことを紹介したい。彼は結局のところ官界と実業界に進んでしまい、以後文学的な活動は行わなかった。また、自伝のようなものも残さなかったようだ。そのため、彼に関する情報を集めるのはかなり困難であった。まずは人物事典から知りうるわずかな情報をまとめておく[2]。

慶応2年（1866）5月、彼は福岡県人相良順治の長男として生まれた。明治23

年文官高等試験に合格。会計検査官試補、会計検査官補、製鉄所書記官兼農商務書記官等を歴任。後に実業界に入り、日本鑄鋼会社専務取締役、東京機械電気株式会社取締役、第一生命保険相互株式会社支配人等を務める。

同じく人物事典によれば、彼は妻屋壽との間に二男五女をもうけたようである。他の子供たちについての詳細は分からないが、次男の惟一（いいち）は長じて著名な人物となる。細かい経歴は割愛するが、教育行政の専門家として官界、学界で活躍し、後には京都大学教授にもなった[3]。

人物事典以外の情報源となるとさらに限られているが、筆者の目にとまった範囲でそれを紹介し、そこから推測しうる彼の経歴を以下に述べてみる。まず、相良常雄が生まれた翌年の慶応3年は、夏目漱石、正岡子規、尾崎紅葉、幸田露伴、南方熊楠、斉藤緑雨といったそうそうたる人物たちが生まれた年である[4]。相良は福岡から上京し大学予備門に入学したはずであり、その入学は漱石、子規、熊楠らと同時であった（紅葉は一年早く入学していた）と考えられる。彼らが予備門に合格したのは明治17年7月のことである。このときの受験者は1,060人で合格者は172人ということであるから、かなりの難関であったようだ[5]。ともかく彼らは9月から晴れて一ツ橋の予備門に通うことになった。

南方熊楠は予備門在学中の明治18年（1885）からの日記が残っており、現在刊行もされている。その18年9月12日の日記に相良常雄とおぼしき名前が登場する。夏休み明けにはじめて予備門に行った熊楠は、落第生の発表を見る。

> 四級生徒落第、正岡常則以下四十余人。新入百人斗り。
>
> 正岡、相良、木村、斉藤、橋本、鈴木、有地、竹川、（以下省略）

このように落第生の名が24名ほど挙げられている[6]。正岡常則とはもちろん正岡子規のこと。そして二番目の「相良」は相良常雄である。予備門は彼らの在学中に改組が行われ、まずこの18年の夏、東京法学校予科と東京外国語学校の仏語科、独語科を吸収合併し、19年4月には工科大学予科を吸収して「第一高等中学校」と改称、予科3年、本科2年というシステムになった（複雑になるので以下この一高のシステムで話を進める）。

熊楠の言う「四級生」とは予科1年生のことである。18年に落第したのだから、熊楠、子規、相良の三人は17年9月から19年7月にかけて1年生を2回やったことになる。もっとも、熊楠は19年の2月に予備門を中退し12月にはアメリカへ旅発ってしまう。

このとき留年しなかった漱石も、よく知られているように19年の7月には落第した。追試験のチャンスがあったにもかかわらず、自らの意志で追試験を受けずに留年することを決め、9月からもういちど予科2年生をやり直した。

当時、『第一高等中学校一覧』という一種の学校要覧が発行されており、その末尾には在校生全員の氏名と出身地が掲載されている。この明治19～20年の冊子（明治20年3月発行）を見ると、「予科第二級（英）一之組」に「塩原金之助　東京」（当時漱石はまだ塩原姓であった）、「正岡常規　愛媛」の記載を見つけることができる。そして、「予科第二級（英）二之組」には「相良常雄　福岡」の記載がある。熊楠は中退しているのでもう名はない。

この時点で漱石と子規は同級に戻りしかも同じクラスになった。22年、本科1年生のときに二人は親しくなり以後親密な交際が続く。23年9月、二人は東京帝国大学文科大学に入学する。子規は25年9月には退学してしまうが漱石は26年7月に無事卒業した。

それでは相良はどうであったのか。実は明確なことは調べがつかなかった。『第一高等中学校一覧』の明治21～22年の冊子を見ると相良の名前が見あたらない。「夏目金之助」「正岡常則」の名は本科一部第一年に記載されている（漱石は三之組、子規は二之組、いずれも英語）。ということは、相良は21年9月までには一高を退学していたということである[7]。『雙児の邂逅』（20年12月版権免許、21年5月刊）の序文には、相良は「就学の余暇に」これを訳したと書かれている。また、相良のもう一つの出版物である『新編論理学』（20年7月版権免許、10月刊）の冒頭には、「在大学　相良常雄編纂」と記されている。したがって、少なくとも20年12月ぐらいまでは一高の生徒であったと思われる。

予科1年次に留年したとしても、その後無事に進級すれば漱石、子規と同じく23年には一高を卒業して東京帝国大学に入学することになったであろう。人物事典の記述を信じるなら、相良は23年に文官高等試験に合格しているから、少なく

とも大学には進学しなかったようだ。つまり、21年9月までに一高を中退し、その後文官試験を受けて官界へ進路を拓いたということである。

相良常雄の著述物

相良常雄の著述物としては二つのものが知られている。一つが『新編論理学』（明治20年7月版権免許、10月刊、出版人は佐藤乙三郎）、もう一つが『雙児の邂逅』であり、いずれも相良が一高に在学していたときの仕事である。前者は論理学の概説書で、坪井九馬三（くめぞう）が校閲を務め、末松謙澄（けんちょう）が序文を書いている（この点は後で詳述する）。相良は「編纂者」ということになっていて、彼自身の「緒言」によれば、本書はジェボン、ベインらの論理学書を広く参照して纂訳編述したものであるという。明治24年3月に『通俗論理学』という本が名古屋の其中堂から出版されているが、これは『新編論理学』の版組を変えふりがななどを補ったもので、中身は全く同じである。序文も日付を変えているだけで同じ文章である。したがって相良の手になる本は実質二冊ということになる。

その後の彼の活動は人物事典の記述以外にはよく分からないが、雑誌記事の索引で調べると、明治40年代に彼が寄稿したとおぼしき生命保険関連の文章が『東京経済雑誌』『保険雑誌』などの雑誌に掲載されていることが分かる[8]。

Ⅱ　『雙児の邂逅』の成立事情

『滑稽狂言　雙児の邂逅』は、明治21年（1888）5月14日、当時の有力な出版社の一つであった金港堂から出版された。奥付には前年の12月22日に「板権許可」とある。シェイクスピアの翻訳はそこそこ発表されていたとはいえ、戯曲の翻訳紹介などまだ珍しかったこの時期に、なぜプラウトゥスの翻訳が出版されたのであろうか。この疑問に答えるためには当時の演劇界や外国文学翻訳など諸々の背景を考慮する必要がある。しかし、本稿ではそのようなところにまで踏み込んで論じる余裕がない。ここでは相良常雄をめぐる人間関係の面だけに光を当てることにして、文学史的、文化史的背景については別稿に譲ることにしたい。

さて、相良常雄自身の日記や回顧録が利用できない以上、『雙児の邂逅』成立の事情を知るためのほとんど唯一の手がかりはこの本そのものということになる。

ただし、相良自身による序文や解説のたぐいは全く付されていない。手がかりとなるのは末松謙澄による「緒言」だけである。

末松謙澄という人物

『雙児の邂逅』はまず末松謙澄による「緒言」が巻頭にある。この人物について簡単に説明しておこう。末松謙澄は、安政2年8月（1855年9月）に福岡県（豊前国）行橋市に生まれた。明治4年に上京し、7年には「東京日日新聞」の記者となって活躍する。その翌年からは政官界の仕事に登用され、11年に日本公使館付一等書記官見習としてイギリスに留学した。英・仏歴史編纂方法取り調べのためという名目であった。14年10月にはケンブリッジ大学に入学して正式に学生としての勉学を始め、主に法学を学んだ。17年5月、法律の最終試験（トライポスと呼ばれる）に合格して12月に法学士号を授与された[9]。

帰国は19年4月で、文部省参事官の辞令を受けていたが4月30日には内務省参事官へ異動、翌年3月には内務省県治局長に昇進する（当時総理大臣は伊藤博文、内務大臣は山県有朋）。22年には伊藤博文の次女生子と結婚した。伊藤博文とは新聞記者時代に親しくなって以来ずっと交際を続けていた。末松が政官界に登用されたのも、イギリスに留学できたのも、おそらく伊藤の後押しのおかげであり、在英中末松は頻繁に伊藤と書簡のやりとりをしている[10]。23年には衆議院議員になり、以後は有力な政治家としても活躍し、伊藤博文内閣の大臣も務めた。大正9年10月5日に65歳で死去している。

官僚、政治家としての経歴が目立つ末松であるが、文人としても優れた業績を残している。イギリス留学時には英文で『成吉斯汗』を著し、『源氏物語』の英訳（明治15年、十七帖までの翻訳）を行った。政官界にあっても健筆をふるっていたようで、ここでは一々紹介しないが、帰国後も著書、編著、翻訳、新聞雑誌記事などかなりたくさんの著述物を残している[11]。

彼の文化人としての活動で最もよく知られているのは、「演劇改良会」（しばいかいりょうかい）である[12]。明治19年に帰朝すると彼は日本の演劇の質向上を目指す「演劇改良会」を発足させた（8月6日に「演劇改良会趣意書」を発表）。さらに10月3日、一ツ橋の第一高等中学校講義室で行われた文学会例会において

「演劇改良の説」と題する演説を行った。この演説はその直後に「時事新報」などに連載され、11月には『演劇改良意見』というタイトルで文学社から単行本の形で出版された。

当然ながら、相良の『雙児の邂逅』を考える上でこの演劇改良会の活動と末松の『演劇改良意見』は無視することができない。しかし、この点については他の文学史的背景とも絡めて論じる必要があるので、本稿では割愛する。

末松の「緒言」について

「緒言」において末松はまずこの訳書が世に出ることになったいきさつを説明している。彼がプラウトゥスと出会うきっかけとなったのはケンブリッジ大学のラテン語の試験であった。試験の課題として彼が勉強したのは『俘虜』（原題は *Captivi.*『捕虜』とも訳される）という作品であった。

ケンブリッジで学士号を得るためには、まずは「予備試験」（通称リトル・ゴー）に合格しなければならない。この「予備試験」は二部に分かれており、第一部はギリシア語、ラテン語の試験、第二部は古典と数学の試験である[13]。プラウトゥスがどちらの試験で出題されたのかは分からないが、とにかく彼はラテン語原典でプラウトゥスを読んだのである。

彼の評価によれば、『雙児の邂逅』は「風調品格」の点では『俘虜』に遙かに及ばないが「滑稽洒楽」は大いに勝っている。かつてこれを読んだときには「殆んど抱腹絶倒に堪へ」なかったという。彼はプラウトゥスの英訳を入手していたから、『雙児の邂逅』すなわち『メナエクムス兄弟』はラテン語ではなく英語で読んだだけかもしれない。しかし、ケンブリッジでの成績は最優秀とは言えないにしてもとにかく予備試験には合格したのだから、ラテン語の勉強として『メナエクムス兄弟』の方も原典で読んでいた可能性は十分考えられる[14]。

さて、末松帰朝の後、相良常雄がやって来て何か「滑稽書」で翻訳するに値するものはないかと訊ねた。そこで自分は『雙児の邂逅』の英訳を与えた。相良は「就学の余暇」にこれを翻訳してついに一書となすに至ったのであった。以上が『雙児の邂逅』成立の経緯である。

続いて末松はプラウトゥスに関する文学史的な概説を書き、この詩人の作品の

性質について若干の説明を加え、彼を褒め称えて文を結んでいる。最後に附言として、予備知識のない日本の読者のために「プロログ」（前口上）というものについての簡単な解説を行っている。

相良と末松の関係

『雙児の邂逅』が世に出ることになった経緯は分かったが、まだ釈然としないことがある。相良と末松はいったいどのような関係だったのであろうか。当時相良は一高の学生、末松は留学から帰ったばかりの役人であり文化人としてもそれなりに名の知れた人物であった。何がきっかけで知り合い、どんな交際をしていたのであろうか。大いに興味あるところだがそれを知るための直接的な資料はない。『雙児の邂逅』の「緒言」を見れば、当時相良が末松のところに出入りしていたことは確かであろう。しかし、二人の接点についての情報は何も見あたらない。相良のもう一つの著作である『新編論理学』の序文も末松が書いているが、そこからも接点は見いだせない（この点は後でも触れる）。

二人の共通点といえば、共に福岡県出身であるということだ。福岡時代からすでにコネクションがあったのであろうか。あるいは、東京で、例えば県人会のようなところで知り合ったのであろうか。筆者には二人が同郷であるという事実以上のことを探り当てることはできなかった。そこで、福岡出身という共通点をいったん脇に置いて別の側面から接点を探ってみたい。すると二人を結びつけた可能性のある人物が三人浮かび上がってくる。それは坪井九馬三（くめぞう）、外山正一、菊池大麓（だいろく）である。

坪井九馬三

相良のもう一つの著作『新編論理学』には末松謙澄が漢文の序文を寄せている。この序文の文章から判断する限り、本の執筆は末松が勧めたわけではなく、原稿ができあがってから相良が末松のもとを訪れて序文を書いてくれるよう頼んだようだ。末松はまだ本文をすべて読んでいない旨のことをここで述べている。この本の執筆を勧めた人物がいるとすれば、それは表紙にも名を載せている校閲者の坪井九馬三であろう。

坪井九馬三（1858-1936）は大阪で生まれ、後に歴史学者として東京帝国大学で教鞭を執るが、彼の学歴は少々変わっている。明治7年に東京に出て東京外国語学校に入学し、同校を8年に卒業すると東京大学に入学、明治14年に政治理財学部をいったん卒業するが9月にはさらに理学部に入学し直し、18年に同応用化学科を卒業している。理学部在学中の16年、東京大学文学部で史学の講義を嘱託される。そして理学部卒業の翌年（19年）、帝国大学文科大学講師と第一高等中学校（予備門）の理財学教授を嘱託されている[15)]。

坪井と相良の関係を知るための資料は全くないので、二人が知り合った事情もよく分からない。だだし、上記の事実から推測するなら、坪井が第一高等中学校で理財学を教えていた明治19年に相良はまだ一高の学生だったわけであるから、相良が坪井の授業を受けた一人であったという可能性は考えられる。

そもそも坪井の経歴を見れば、なぜ「論理学」なのかという疑問が生まれるであろう。実は彼自身が『論理学講義』という本を出版しているのである。これは彼が東京大学理学部の学生であった明治16年10月に出版したものである。その序文によれば、彼は16年の夏休みに弘文館において生徒の需要に応じるために論理学の講義を行った。その講義のために作った草案を基に作ったのが本書である。序文は外山正一が書いている。坪井は内外の色々な本を参考にしたが、外山正一が「嘗テ大学文学部ニ於テ講述セラレシ論説」も採り入れたと書いている。坪井は明治20年に『論理学入門』というより簡便な本も出版している。「生徒の需要」の話にあるとおり、論理学は思考することそのものの原理を学ぶ学問と受けとめられていたようで、学問分野を問わずこれを学びたいという要請が強かったのではないかと思われる。文理両方の学問に通じていた坪井は両分野の思考法の基礎となるものとして論理学の入門書を企図したのであろう。『論理学講義』初版の序文によれば、彼は自分の本に自信を持てなかったようで、いつか改訂したいと思っていた。そして実際19年に改訂第二版を出している。さらにその延長として自分で執筆する代わりに相良にまとめさせたのが『新編論理学』なのではないだろうか。明治20年、坪井は3年のドイツ留学を命じられ、10月にはベルリン大学に入学している。『新編論理学』の版権は7月19日に取得されているから、原稿の完成までは見届けたが出版のときにはドイツの地にいたことになる。

外山正一

外山正一（1848-1900）は東京帝国大学の社会学の教授であった人物であるが、その活動は多岐にわたる。ここでは本論に必要な情報だけをまとめておく。彼は慶応 2 年（1866）に幕府がイギリスに派遣した留学生の一人であった（当時 19 歳）。彼の留学先はロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジの附属高校であるユニヴァーシティ・カレッジ・スクールであったが、入学してまだ間もないときに幕府が崩壊したため 1868 年には帰国を余儀なくされた。帰国後、静岡学問所や外務省で働き、明治 3 年（1870）に森有礼に随行してアメリカへ渡る。5 年にミシガン州アンポール・ハイスクールの留学生となる。翌年 9 月にはミシガン大学に入学し主に理学と哲学を勉強、明治 9 年に化学科を卒業して帰国した。帰国するとすぐに東京開成学校の化学の教授になり、翌年には改組後の東京帝国大学文学部教授に就任して心理学と英語を教えた。その後哲学、史学なども教えたが、明治 26 年（1893）に社会学講座の担当となる[16]。

外山の活動は実に多様な分野にわたっていて、その一つ一つをここで紹介する余裕はないが、例えば明治 15 年に矢田部良吉、井上哲次郎と共に『新体詩抄』を発表したことはよく知られている業績であろう。

坪井九馬三が東大で外山の論理学に関する講義を聴講したのは明治 14 年か 15 年のことである。14 年に外山は文学部長となり、授業としては哲学、史学、英語を担当していた。坪井は理学部であったから、純粋に学問的な興味から外山の授業を聴講に行ったものと思われる。そこから個人的な交際が始まり、16 年に『論理学講義』の序文を書いてもらうことになったという経緯ではないだろうか。

菊池大麓

菊池大麓（1855-1917）は学者一家として有名な津山藩箕作家の人間である。彼は箕作秋坪の次男であるが、父秋坪は箕作阮甫の養子であったので、次男の彼が父の実家の菊池姓を継いだ。彼のめざましい経歴についてもここで一々述べるのは控えて、目下の問題に関係のある点だけを記す[17]。

彼は外山正一と同じく慶応 2 年に幕府がイギリスに派遣した留学生の一人であった。まだ 11 歳の少年であったが、彼は 9 歳ですでに開成所で英語を教えてい

たという。彼の留学先もユニヴァーシティ・カレッジ・スクールであったが、幕府の瓦解にともなって1868年に帰国。しかし、明治3年にはイギリス留学を命じられ、再びユニヴァーシティ・カレッジ・スクールに戻ることができた。明治6年（1873）に同校を主席で卒業すると（ギリシア語、ラテン語、数学の主要三科目のうちラテン語と数学でトップの成績を収めた）、10月にケンブリッジ大学に入学して主に数学を勉強した。明治10年（1877）に最終試験であるトライポス試験に見事合格し優等学位を得て卒業している。5月に帰国すると8月には弱冠22歳で東京大学理学部教授に就任した。坪井九馬三が東京大学の理学部で学んでいたとき、すなわち明治14年から18年、菊池大麓は理学部の教授であった。

実は菊池大麓も論理学の本を書いている。明治15年に同盟舎から出版した『論理略説』という和装の本で、内容は題名どおり論理学の概説書である。坪井九馬三は理学部在学中とはいえ論理学に深い関心を抱いていたから、『論理略説』を出したばかりの菊池に個人的に教えを請うたとしても不思議ではない。『論理学講義』の序文で、坪井は参考にした本として当然ながら菊池の本も挙げている。

このように菊池から坪井、坪井から相良へと、あたかも引き継ぐかのように三人の人物が論理学の概説書を世に出したのであった。そして、坪井の書には外山も寄与している。相良は『新編論理学』の「緒言」において、訳語を決める際に参考にしたものとして「菊池教授の論理略説」「坪井学士の論理学講義」「添田学士の論理新編」を挙げている[18]。

それでは、上述の人物たちと末松との関係に話を移そう。菊池大麓、外山正一、末松謙澄の三人は親しい間柄であったと思われる。菊池と外山は短い期間とはいえ共にイギリスに留学した仲である。二人は同時期に東大の教授でもあった[19]。

次に菊池と末松であるが、菊池の弟である箕作佳吉と末松は、末松が「東京日日新聞」の記者をしていた時代からの友人であった。末松は菊池とちょうど入れ違いにイギリスに渡っているが、そのころ佳吉はアメリカに留学していた。佳吉は卒業すると帰国前（明治14年）にヨーロッパを旅行したが、その途中でケンブリッジに滞在しそこで末松と会っている。この明治14年に末松はケンブリッジ大学に入学できたのであるが、それはどうやら佳吉を通じて菊池大麓に紹介状を書

いてもらったおかげらしい[20]。そのようなこともあってか、末松の帰国後も菊池との交際は続いたようである。末松が「演劇改良会」を興したとき、菊池は会員23名のうちの一人に入っている（箕作佳吉も、菊池と佳吉の従兄弟である箕作麟祥も入っている）[21]。

外山正一も「演劇改良会」の会員であった。彼は末松が「演劇改良の説」演説を行う前月に『演劇改良論私考』を丸善書店から出版して彼個人の改良論を披露した。つまり外山は改良会の有力メンバーだったのである。二人の関係の詳細までは分からないが、当然ながら外山と末松も親しい関係にあったと考えるのが自然であろう。

坪井九馬三と末松との結びつきはよく分からないが、上に述べたように坪井と外山正一は『論理学講義』の件でつながっている。坪井と菊池大麓の関係について言えば、先にも述べたように菊池は坪井が東大理学部の学生であったときその教授であり、少なくとも論理学への関心という点ではつながっていたので、個人的な交際を推測できる。

以上、菊池大麓、末松謙澄、外山正一、坪井九馬三という四名の人物のつながりを明らかにしてみた。四人がそれぞれどの程度親しくつき合っていたかには差があるだろうが、おそらく皆それなりに親しかったはずである。それでは相良についてはどう考えればよいのか。以下は筆者の想像である。坪井は一高で教鞭を執っていたときに相良を知り『新編論理学』の執筆を彼に勧めた。坪井はそのことを菊池か外山に話し、菊池（外山）は序文を書いてくれる人物として末松を紹介してくれた（このとき相良は菊池や外山の知遇を得ていたかもしれない）。あるいは、菊池や外山を通じて坪井がすでに末松とつきあいがあったとすれば、坪井が自分で末松に口を利いてやった。なぜ序文が末松でなければならなかったのかという疑問は残るとしても、とにかく『新編論理学』の序文は末松ということになった。

結局のところあやふやな推測の域を出ないが、相良と末松を結びつけるものとしては、筆者の調べ得た範囲ではこのような人脈しか思い当たるものがない。なお、繰り返すが、これは相良と末松が同郷であるという事実をいったん脇に置いての話である。

『新編論理学』の出版は明治20年10月であるから、明治19年10月3日に末松が第一高等中学校講義室で「演劇改良の説」の演説を行ったとき、二人にすでに面識があったかどうかは分からない。しかし、当時一高の学生であった相良がこの演説を聴いていた可能性は高いと思われる。『新編論理学』の序文の件で世話になって以後は、相良は末松のところに出入りするようになったのであろう。その個人的なつきあいの中で末松が相良にプラウトゥスの翻訳を勧めたことにより、『雙児の邂逅』が生まれたわけである。

金港堂という書店

『雙児の邂逅』の出版元である金港堂という書店についても、簡単に触れておく[22]。金港堂は明治8年に原亮三郎が創業した書店で、その初期には教科書の出版社として全国一のシェアを誇った。明治20年代には文学書と文芸雑誌にも力を入れ始めた。文学史的に最も有名なのは、明治20年6月に二葉亭四迷の『浮雲』第一篇を出版したことであろう。21年8月には山田美妙の『夏木立』を出版し、10月には中根香亭、山田美妙らによる文芸雑誌『都の花』を創刊している。

つまり、『雙児の邂逅』が出版された明治21年、金港堂はすでに名の通った大書店であり、ちょうど文学書に力を入れ始めているところであった。相良のような一介の高等中学校生がこのような有力書店から本を出版することができたのは、ひとえに末松謙澄の後押しがあったからであろう[23]。

末松と金港堂の関係がどこから始まったのかは分からないが、彼はこの書店にコネクションを持っていた。明治21年2月、彼はこの金港堂から『谷間の姫百合』という翻訳小説を出版している[24]。また、演劇改良運動と関係があり彼が解説文を寄せている『梨園の曙』という翻訳書も明治20年1月に金港堂から出版されている。これは高橋義雄という人物がイギリスの現代劇を翻訳翻案したものである（『梨園の曙』についての詳細は別稿に譲る）。末松は色々な出版社から本を出しており、その中でも特に金港堂が多いというわけではないが、例えば明治24年には修身関係の本を三冊この書店から出版している。

金港堂は博文館などの新興書店に押されるようになり、疑獄事件を起こしたことなどもあって明治の末期には姿を消してしまった。

Ⅲ 『雙児の邂逅』という作品について

『雙児の邂逅』の底本

この『雙児の邂逅』はラテン語からの原典訳ではない。相良が翻訳に用いたのは、「緒言」にあるとおり末松謙澄が彼に渡した英訳書である。この末松の蔵書はライリー（Henry Thomas Riley）による英訳書であったはずだ[25]。ローマ喜劇の場合、作者が幕・場の分け方をテクスト上に指定しているわけではないので、その分け方はテクストの校訂者によって意見が分かれることがある。相良訳の幕・場の分け方はライリー訳と全く同じである。また、登場人物の入退場の表記や「傍白」などのト書きも伝承されてはいないので、これも普通は校訂者や翻訳者が自分で付ける。相良訳はこの点でもライリー訳の文言をほぼそのまま訳している。よって、相良の底本がライリー訳であったことは確実である。彼の経歴を考えれば、ラテン語原典を併せて参照した可能性はまずないと言ってよいだろう。

プラウトゥスと『メナエクムス兄弟』

ティトゥス・マッキウス・プラウトゥス（Titus Maccius Plautus）は紀元前 200 年前後に活躍した古代ローマの喜劇作家である。彼の作品は 20 編ほどがほぼ完全な形で伝わっているが、すべてギリシア新喜劇の作品を下敷きにしている。『メナエクムス兄弟』（*Menaechmi*）ももちろんそうであるが、そのギリシアの原作が何なのかは分かっていない。

『メナエクムス兄弟』は人違いの喜劇である。事の発端は主人公が七歳の時に起こった誘拐事件であった。シチリア島のシュラクサエの町に住む商人に、見分けのつかないほどそっくりな双子の息子があった。商人が息子の一人メナエクムス（以下便宜上メナエクムス A とする）を連れて商売のためにタレントゥムの町に出かけたとき、その息子が父親からはぐれてしまい、それをエピダムヌスの町から来ていたある商人が連れ去ってしまった。父は悲しみのあまりその地で他界、知らせを聞いた祖父は、双子の片割れソシクレスをメナエクムス（以下メナエクムス B とする）と改名して育てた。一方、子供をさらったエピダムヌスの商人はメナエクムス A を自分の子として育て、大きな財産を残してこの世を去る。

劇は成人となったメナエクムス B が自分の兄弟を捜しにエピダムヌスへやって

来るところから始まる。この日メナエクムスAは、妻のマントを盗み出して遊女のエロティウムにプレゼントし、食客のペニクルスといっしょに彼女の家で飲み食いをしようとしていた。メナエクムスAが公共広場へ出かけた後、エロティウムの料理人、エロティウム、ペニクルスが次々とメナエクムスBと出会い、これをAだと思いこんでちぐはぐなやりとりを行う。何より名前が同じなのでなかなか間違いに気づかないし、Bも適当にAのふりをしたりするものだからますます混乱が起こる。一方、何も知らないAは、Bのせいで訳も分からず妻になじられたり、エロティウムに愛想を尽かされたりする。

さらにAの妻が通りかかったBをつかまえて怒り出し、自分の父親を連れてくる。Bの態度を見て妻と舅は気が狂ったと思いこみ医者を呼びにやる。医者が来るとBはもうおらず、代わりにAの方が現れる。Aは狂人扱いされ連行されそうになるが、Bの召使いメッセニオに助けられる。最後に双子が顔を合わせ、自分たちが兄弟であることを確認すると、二人でシュラクサエに帰ることに決め劇は終わる。

このようにドタバタ劇の色合いの強い作品だが、読んで素直に面白い作品でありプラウトゥスの秀作の一つと言ってよい。後世に与えた影響も大きく、様々な国の様々な作家がこの劇を素材に作品を作っている。最も有名なものはシェイクスピアの『間違いの喜劇』であろう。

原典との比較

この古代ローマ（元々はギリシアだが）を舞台とする作品を相良はどのように翻訳したのであろうか。これを考えるためには、当然ながら明治21年当時の演劇翻訳の事情といった文学史的背景、文化史的背景を考慮に入れなければならない。しかし、本論では紙数の都合上こうしたことを詳しく論じる余裕がない。そこで、そうした考察は別稿に譲ることにして、ここではそうした背景をあえて全く考慮しないで、「西洋古典学の一研究者が予備知識なしに相良の翻訳をながめたら、どのようなことに興味を引かれるか」という観点から論じてみたい。なお、細かいところまで注目すれば取り上げるべき点はたくさんあるのだが、これも紙数の都合上主なものだけに絞って論じる[26]。

登場人物

まず基本的なこととして、ローマ喜劇はすべて韻文劇であるが、ライリーの翻訳も散文訳であるし相良の訳も散文訳である。また、相良は古代ローマ（ギリシア）という舞台設定を全面的に日本に移している。したがって登場人物の名前はすべて日本人の名前に変えられている。本の冒頭には「登場人物左の如し」として上段に日本名、下段に原名を挙げる形で登場人物表が付されている。以下に主な登場人物の名の対照を挙げる。原名は英語読みになっているがここではラテン語読みに直しておく。また、以下登場人物に言及するときはこのラテン語名を用いる。

江戸の松太郎―エピダムヌスのメナエクムス（メナエクムスA）
長崎の松太郎（元の名は梅太郎）―シュラクサエのメナエクムス、旧名ソシクレス（メナエクムスB）
幇間の須本治（すぽんじ）―ペニクルス、メナエクムスAの食客
下部の八助―メッセニオ、メナエクムスBの奴隷
松太郎の女房お春―［メナエクムスAの妻の名は原典では言及なし］
芸妓の小竹―エロティウム、遊女でメナエクムスAの愛人
料理番の鍋蔵―キュリンドルス、エロティウムの料理番
松太郎の舅太郎兵衛―［メナエクムスAの舅の名は原典では言及なし］

主人公の名前、遊女の名前、兄弟の元の名前を見ると、松、竹、梅となっており、このあたりはかなり適当に名前を付けているのではないかと思われるし、他の人物についても平凡な名前が選ばれている。

ユニークなのは「須本治」で、ペニクルスの名がラテン語で「スポンジ」を意味することに基づいている。このことはライリーが286行に付した脚注に書かれており、相良はそれを見て戯れに「須本治」という当て字の名前を付けたのである[27]。

料理番の「鍋蔵」ももちろん戯訳で、ライリーが295行に付した注を参考に作ったものである。つまり「キュリンドルス」が役柄に引っかけての命名であること

を正しく判断したわけであるが、「キュリンドルス」はおそらく「麺棒」の意味であり[28]、ライリーの注でもそう説明されているので、「鍋蔵」は相良の独創ということになる。

劇中の地名

メナエクムス兄弟の故郷であるシチリア島のシュラクサエは長崎に、メナエクムスAが育った地であり劇の舞台ともなるエピダムヌス（現在のアルバニア西部の町ドルレスに当たる）は江戸に変えられている。メナエクムスAが幼時にさらわれる場所は、原典ではタレントゥム（イタリア半島南部の町）、相良訳では大阪になっている。したがって、シュラクサエ（長崎）からタレントゥム（大阪）に出かけたときにさらわれ、そこからさらに遠いエピダムヌス（江戸）へ連れ去られたという地理関係になっている。また、相良訳（19頁）において長崎の松太郎と八助は、兄弟を捜し出すためにまず四国九州を回りさらに山陽近畿東海道を経巡ってきたと語られているが、プラウトゥスの原典では地中海沿岸の町々を巡ってきたことになっている。江戸に着いたのは6年目のことである。この箇所を考慮に入れれば、「長崎－大阪－江戸」という設定は、規模の違いはあるにせよ、日本国内ということであれば、方角的、距離的に適切な設定であると言える。まず劇の舞台を江戸に設定するのは自然なことであろう。あとの長崎、大阪という設定はこの捜索の旅への言及の箇所から思いついたのかもしれない。

テクストの欠損箇所

ギリシア・ローマの古典作品のほとんどは写本で伝わるため、様々な理由からテクストが完全な形で伝わるということはまれである。テクストを校訂する者は諸写本やパピルス断片をつき合わせてテクストを校訂していくが、それでも解読不明の箇所や欠損箇所は多かれ少なかれ残ってしまう。プラウトゥスのテクストもその例外ではない。テクスト上の問題が比較的多い作家だと言ってもよい。ライリーの翻訳はどのテクストを底本にしたのか明記していないが、とにかく彼がテクストの問題にあまり注意を払わなかったことは一見して明らかだ。ライリーは欠損部分を「＊＊＊」の記号で示しているが、訳文上で欠損部分を自分の推測

で補ったり、注を付けて推測される意味を記したりすることは少なく、文脈がとぎれている箇所でも「＊＊＊」を記すのみのことが多い。また、ライリー訳（またはその底本）はかなり多くの欠損箇所を想定しており、最近のテクストでは欠損とされていないところが相当数欠損箇所扱いになっている。にもかかわらず、欠損を想定する理由などもほとんど注記されていない。

相良はこの記号の意味を理解し得たのだろうか。テクスト校訂の約束事を全く知らなかったとすれば（おそらく知らなかったであろう）、初見の際にはさぞ不可解なものに映ったに違いない。末松謙澄はケンブリッジで古典語、古典文学を学んでいるから、この点については多少の知識があったはずだ。おそらく、「＊＊＊」がテクストに問題のある箇所であることぐらいは末松から教えてもらったものと思われる。

それでは、このテクストの欠損部分を相良はどう処理したのか。彼は半分ほどは無視し、半分ほどは欠損を自分の創作で補っている。無視したといっても原意を損なわない範囲でのことであり、原典を知らない読者はその箇所に違和感を抱くことはほとんどないであろう。

相良が補った箇所についていえば、補わなければ文脈が通じないという箇所もあるし、補う必要もないが補っているという箇所もある。後者は、ライリー訳において文脈がつながっているのに何故かその途中に欠損を想定しているような場合である。また、相良は原文に欠損があることなどは全く注記していない（後でも述べるが『雙児の邂逅』には注というものがほとんどない）。総じて言えば、相良の補完は自然であり、原文を知らない読者は何の疑問も持たずに淀みなく読み進められるようになっている。一例を挙げよう。

（原典416-418行）MEN.B. quin tu tace modo./ bene res geritur. adsentabor quidquid dicet mulieri,/ si possum hospitium nancisci.

メナエクムスB：黙っていないか。（傍白）ことはうまく運んでいる。この女の言うことには何でも相づちを打とう。いい目を見られるかもしれないからな。

（ライリー訳）(apart.). But you only hold your tongue * * * * * * * The matter goes on well. I shall assent to the woman, whatever she shall say, if I can get some entertainment.

（相良訳 37 頁）松・梅：（声を小さくして）まあ宜いから其方は黙つて居て下され……何(ど)ふさへ仕方のない場合になつて来たから……しかし都合よく行きそふだ……まあ宜いは御馳走をしてくれると云ふから行つた方が得ではないか

文脈上つながっているところにライリーが脱落を想定しているため、相良はそれに素直に従って「何ふさへ仕方のない場合になつて来たから」という一文を、一種の埋め草として挿入しているわけである。

前口上

プラウトゥスの喜劇作品には前口上（prologus）があることが多く、『メナエクムス兄弟』にも前口上がある。この作品の前口上を語るのは登場人物ではなくそれ専用の口上役である。相良はこの前口上をほぼ忠実に訳しているが、以下の部分だけは自分で創作している。

……一体是れは羅馬のプロータスと申しまする名高き狂言作者が作りましたる滑稽(おどけ)狂言で御座りまするが其の仕組の至て面白いところから、これを我国の言葉に直ほしまして御覧に入れるので御座りまする、素より人情風俗の違つておりまするのを其儘に致して人物の名前ばかりを改めましたことで御座りますれば、西洋人に羽織袴を着せました様に辻褄の合ひませぬところが定めて沢山では御座りましょうが、そこの處は悪しからず御承知を希ひまする、（1-2 頁）

この箇所のラテン語原文は、喜劇作家の中にはどんな劇でも舞台をアテナイにしてギリシア風に見せようとする者がいるが、自分はそのままシチリアを舞台に

する、という内容である。ローマ喜劇とギリシア喜劇の関係を知らなければ理解困難な文章であり、そのまま訳出しなかったのは賢明な判断であろう。その代わりに相良は、ローマと日本で人情風俗が違っていてもそれをそのままにすると宣言し、辻褄が合わないこともあることをあらかじめ断っている。もう一つ相良の文章で目を引くのは、「仕組が面白い」と言っていることである。つまり、相良は本劇の筋立て・プロットに価値を認めているのである。

しゃれ・言葉遊び

プラウトゥスはしゃれや言葉遊びが好きな作家である。『メナエクムス兄弟』は比較的それが少ない作品であると思うが、それでも何ヶ所かは指摘できる。これを相良がどう訳したかといえば、全く訳文に反映させなかったと言ってよい。理由としては、それらのしゃれがラテン語を知らないと理解しづらいものであること、ライリーが英語のしゃれとして工夫した訳を必ずしもしていないことが挙げられる。ライリーは英訳に反映させにくいしゃれの場合、しゃれの趣旨を注で説明していることもある。しかし、その注だけを頼りに日本語の訳文に工夫をこらせというのは、相良には無理な要求と言えるだろう。

意図的に原文から外れる訳をしている箇所

『雙児の邂逅』は明治21年という年代を考えればすぐれて原文に忠実な翻訳である[29]。しかし、現代人の目にはかなり自由に原文を改変した訳文と映るであろう。訳しづらい箇所や訳すと注釈が必要になるような箇所を訳出していないことも多い。少々卑猥な表現を含む箇所も訳出を避けている。また、プラウトゥスの特徴として「地獄に行け」といった類の罵り言葉がふんだんに出てくるが、こうした乱暴な言葉も相良は穏やかなものに変えている。一例を挙げる。

（原典912行）quin tu te suspendis?　首でも吊ったらどうだ。

（ライリー訳）Why don't you go hang yourself?

（相良訳 98 頁）お前さまは何を言つて居らつしやります

原文にないものを挿入している場合もある。プラウトゥスの原文は韻文であるせいもあって、概して台詞が簡潔になる。二人の人物がやりとりしている場合でも、日常会話ならば入れるのが自然な相づちやつなぎの言葉といったものがなく、話の要点だけが一種ぶっきらぼうに述べられることが珍しくない。特に一行を二人以上の人物の台詞に割り当てる割台詞の場合はそうである。このような箇所では相良はライリーの忠実な訳に従わず、自然な流れになるようにしばしば自分で言葉を挿入している（ライリー訳は省略）。

（原典 648 行以下）MA. palla, inquam, periit domo./ MEN. quis eam surrupuit? MA. pol istuc ille scit qui illam apstulit./ MEN. quis is homo est? MA. Menaechmus quidam. MEN. edepol factum nequiter./ quis is Menaechmust? MA. tu istic, inquam. MEN. egone? MA. tu. MEN. quis arguit?/ MA. egomet.
婦人：家でマントがなくなったって言ってるのよ。／メナエクムス A：誰が盗んだんだ。　婦人：それは取った人が知ってるはずよ。／メナエクムス A：そいつは誰なんだい？　婦人：メナエクムスとかいう人。　メナエクムス A：何と下劣な仕業だ。／そのメナエクムスというのはどいつなんだ？　婦人：そこにいるあなたでしょ。　メナエクムス A：僕だって？　婦人：あなたよ。メナエクムス A：誰がそう言うんだ？／婦人：私よ。

（相良訳 68-69 頁）春：アノ羽織をあなた、内から盗み出しましたのです
松太郎：そんなに同じことを二遍言はないでも宜しい誰が盗み出したと
春：それは盗み出した人が一番能く知て居ますでせう
松：盗み出した奴は何んなものか知らぬが怪しからん
春：オーそれそれ松太郎とか云ふお人たそうふで
松：それは以ての外な事だ、その松太郎と云ふ奴は何處に居るのじや、何んな奴じや
春：外ではありません今こゝに、言（もの）をいつて居るあなたですは

松：何、己(お)れと
春：左様です、あなたで御座ります
松：誰れが其様なことを言ふのじや
春：此の私が、あなた、そふ申しますので

「そのメナエクムスというのはどいつなんだ？／そこにいるあなたでしょ。／僕だって？／あなたよ。／誰がそう言うんだ？」というやりとりは原典ではたった1行である。二人の人物が交互に短い言葉を交わしていく割台詞は、テンポが良く韻文のおもしろみを強く観衆に印象づける。相良訳は原典の音楽的効果や素早い言葉のやりとりの妙味といった要素が完全に消えてしまっており、台詞の内容を散文的に展開したものになっている。ライリー訳からして韻文ではないし、原典に忠実とはいってもリズムを意識したものではないので、相良がそのような効果を想像することはそもそも不可能であった。相良の訳文がかなり補足的であることからすると、相良にはライリー訳ですら言葉があまりに簡潔すぎて何かぶっきらぼうだと感じられたようだ。彼にとっては台詞が人が話す会話として自然であることが重要であった。したがって、原文と並べると過多とも見えるほど言葉を補充して訳文を作っているのである。このような箇所は『雙児の邂逅』のいたるところに見られる。

次に特殊な例を挙げる。単なる埋め草的な挿入ではないものである（ライリー訳は省略）。

（原典221行以下）CY. quoiusmodi hic homines erunt?/ ER. ego et Menaechmus et parasitus eiius.　キュリンドルス：どういう人たちなんですか？
エロティウム：私とメナエクムスと彼の食客よ。

（相良訳17頁）鍋：三人とは誰れと誰れで、そりよォ聞かなくつちやあ
竹：五月蠅(うるさい)ネー、松旦那と妾(わた)しとそしてあの幇間サ

三人分の料理を用意すべく市場へ買い出しを命じられた料理番の鍋蔵（キュリ

ンドルス）が、客とは具体的に誰なのかを問うたときの小竹（エロティウム）の台詞である。「五月蠅ネー」は原文にもライリー訳にもない。ここで相良は小竹の性格付けを行っているように見える。つまり使用人に対して尊大な態度を取る女という性格である。プラウトゥスの喜劇において遊女は重要な役割を果たすことが少なくないが、『メナエクムス兄弟』のエロティウムは劇の中で中心的な役割を果たす人物ではない。また、原典を読む限り彼女の性格というものが特別な色づけをされて描かれているようには思えない。ただし、少々興味を引く点はある。356行以下のエロティウムの独白からは、彼女が打算でメナエクムスAに尽くしており、あくまでも彼を「金づる」として見ていることが伺える。もっとも、それは遊女としては不自然なことではないし、プラウトゥスもその点を特別強調して描いているようには見えない。

もし小竹を「五月蠅ネー」という台詞から伺えるような嫌な女として描こうと思うなら、このお金に関する箇所はぜひ強調すべき箇所であろう。しかし、相良はこの箇所を訳出していない。また、訳全体を見渡しても小竹を金にうるさい人物として描こうというような意志は全く感じられない[30]。結局のところ、相良訳全体の中で小竹の嫌な性格が描かれているのは上の17頁の箇所だけである。つまり「五月蠅ネー」はその場限りの思いつきであり、劇全体にわたって何らかの改編を加えることで小竹の性格をこの台詞にふさわしいものに描こうなどという意図はなかったようだ。

ギリシア・ローマ神話

明治20年代の当時、ギリシア・ローマ神話の神や英雄たちの名は一般的にそれほどなじみのあるものではなかったはずだし、神話の個々のエピソードもほとんど知られていなかったであろう。相良訳は劇全体を日本での出来事に変えているので、日本人の登場人物がそうした固有名詞や神話への言及を原典のまま口にすれば大きな違和感が生じる。これに対して相良はいくつかの処理のし方をしているが、中にはたいへんユニークなものもある。主だったものを以下に紹介しよう。

まず神の名前であるが、誓いの言葉などで頻出する「ユッピテル」は「神様」とされることが多く、ある箇所（101頁、原典931-933行）では「天照皇大神宮」

という訳もなされている。その他の神では「ケレス→飲食(のみくひ)の神様」（3 頁、原典 101 行）「アポロ→不動様」（90 頁、原典 840 行）といった訳をしている。

31 頁には「ビーナス（恋の神）様」という例がある（原典 371 行の Venus ウェヌス、ライリー訳はそのまま Venus）。『雙児の邂逅』には注というものがほとんどないので、ここは注の付いている珍しい例である。

次の例はギリシア神話の人名・エピソードを完全に日本の故事に置き換えてしまっている例であり、相良の遊び心が感じられる（ラテン語原文、ライリー訳は省略）[31]。

（原典 200-201 行）ヘルクレスがヒッポリュタの腰帯を奪い取ったときも、これほどの危険は冒さなかっただろう

（相良訳 15 頁）石川五右衛門が千鳥の香爐を盗み出したときの心配もあれほどではなかつたろう

当然ながら、ギリシア神話への言及（固有名詞も含めて）を無理に訳文に反映させず、うまく読者に意識させないように工夫している例も多くある。その中でも目を引くのは次の一節である。

（原文 902 行）meus Vlixes, suo qui regi tantum conciuit mali.　ウリクセスめ、自分の主君をこんな目にあわせやがって。

（ライリー訳）my own Ulysses, who has brought so great evil on his king.

（相良訳 96 頁）飼ひ犬に足を噛まれるタアほんとに此んな事だろう、

ウリクセス（オデュッセウス）はトロイア戦争における英雄であるが、後の時代には「狡知に長けた人物」という悪いイメージを負わされるようになった。この箇所も「狡いやつ」という程度の意味で引き合いに出されている。ライリーは

この箇所に注を付けているが、少しピントはずれの説明になっていて相良にはあまり役に立たなかったと思われる。相良の訳文は文脈から判断してのものなのであろうが、ウリクセスの名を出さず日本の慣用句を用いたことで結果的にはとてもこなれた訳になっている。

ギリシア神話をギリシア神話として訳出している例もある（ラテン語原文は省略）。

（原典 714-718 行）メナエクムス B：ご婦人、どうしてギリシア人がヘクバのことを雌犬だと言ったか、ご存じですか？　婦人：知るもんですか。／メナエクムス B：ヘクバは今あなたがしているのと同じことをやったからなんです。／誰となく会う人みなにあらゆる悪口を浴びせかけたんです。／それで雌犬などと呼ばれるようになったんですが、それも当然です。

（ライリー訳）MEN. Don't you know, madam, for what reason the Greeks used to say that Hecuba was a bitch? WIFE. I don't know, indeed. MEN. Because Hecuba used to do the same thing that you are now doing. She used to heap all kinds of imprecations on every one she saw; and, therefore, for that reason she was properly begun to be called a bitch.

（相良訳 77 頁）長崎の松太郎：モシおかみさん、希臘とかいふ国でネ、道楽な女のことをヘキユーバと云ふそふだが、其の訳を御存じかネ、
春：イーエそんな六ケしい事は知りませんヨ、
長崎の松太郎：知らんなら言って聞かせませう、昔しヘキユーバと言ふ女があつてネ、丁度御前さんを見たよふに、いつでもいつでも見附けた男に無遠慮ばつかり言かけて居つたから、とふどふ道楽な女のことをそふ言ふよふになつたとサ、

ヘクバ（ヘカベ）とはトロイア王プリアモスの妻である。トロイア戦争がギリシア軍の勝利に終わると彼女は捕虜となり奴隷の身となった。伝承は様々である

が最後には彼女は雌犬に変身したと言われている[32]。その神話をふまえての台詞のやりとりであるが、相良がライリー訳のbitchを文字どおり「雌犬」ととらずに「放埒な女」の意味で解してしまったため、少々違和感を覚える訳文になっている。ただしここで注目すべきは「希臘とかいふ国でネ」「知らんなら言って聞かせませう、昔しヘキユーバと言ふ女があつてネ」といった言葉である。このようにギリシアの故事をはっきりギリシアの故事として解説的に提示しているのはこの箇所ぐらいである。

このように見てくると、相良がギリシア・ローマ神話やその登場人物について辞典などである程度は調べていたことがうかがえる。その上で、読者に読みやすいようにとの配慮から、場合に応じて様々に翻訳を工夫していたのである。

古代ローマの社会風俗

次に、『メナエクムス兄弟』に描かれている古代ローマ特有の社会風俗を、相良がどのように日本語に移したかを見てみたい。もちろん社会風俗といっても現実そのものではなく、作品世界の中に描かれたものである。そうした限定はあっても、作品に現れるローマ特有の事柄は当時の日本人にはまるでなじみがなかったであろうから、それを相良がどのように捉えたのかということは興味を引かれる点である。これも紙数の都合上三点だけに絞る。

パトロヌス（patronus）とクリエンス（cliens）

古代ローマにはクリエンテーラ（clientela）と呼ばれる独特の人間関係があった。パトロヌスは社会的地位の高い有力者であり、クリエンスはその庇護を受ける者たちである。パトロヌスはクリエンスに普段から経済的援助を行い、クリエンスが訴訟などで窮地に立てば救済の手段を講じる。クリエンスの方はパトロヌスが政治の舞台に出ようというときには熱烈な支持者として選挙運動を行うし、普段も毎日のように日参して彼のご機嫌を伺う。簡単に言えば親分と子分の関係であるが、これに適当な訳語を当てるのは難しい。

『メナエクムス兄弟』の中でメナエクムスAはパトロヌスの立場にある。571行以下には彼の独白による一種のクリエンテーラ論があるが、これは劇の本筋とは

関係の薄い挿入的な部分である。当然ながらこの箇所にはパトロヌスとクリエンスという単語が集中して現れる。訳文の都合もあって相良はその一つ一つをすべて訳出しているわけではないが、この一節からは相良の理解の一端が読みとれる。

55 頁では clientes を「自分の取巻き」と訳している（原典 574 行、ライリー訳は dependants で直後に clients の語も使っている）。これは適切な訳に見えるのだが、56 頁では「お仲間」という言葉を使っている。さらにその少し後ろでは patronis を「仲間」と訳している（原典 585 行、ライリー訳では patrons）。この一節の内容はといえば、原典では、訴訟沙汰ばかり起こすやっかいなクリエンスについて、その弁護を引き受けねばならないパトロヌスの立場にあるメナエクムスAがぼやいているのである。相良訳ではメナエクムスのぼやきは少々意味合いが変わってしまい、「仲間」といってもいいやつも悪いやつもいるので、悪いやつが訴訟沙汰を起こすと自分はいつもそれに振り回されてしまう、という趣旨になっている。

このようにクリエンテーラは相良にとっては理解しにくいものであった[33]。彼の訳文ではパトロヌスとクリエンスがあたかも対等な人間関係（仲間同士）にあるかのように受け取れる。とはいえ、作品の筋とはあまり有機的に結びついていない 20 行あまりの記述だけからクリエンテーラを把握することは、きわめて難しいことであろう。末松謙澄からも特別な助言は得られなかったようだ。

parasitus

上述のメナエクムスの独白はあくまでも一般論、あるいは自分が抱えている多くのクリエンスに関する話であって、ペニクルスのことを言っているのではない。ペニクルスも彼のクリエンスの一人であるはずだが、彼は劇中では一貫して parasitus（食客）という言葉で言及されている。parasitus はギリシア喜劇にさかのぼる喜劇のスットクキャラクターであり、おどけた振る舞いや滑稽な物言いによって自分より地位の高い人物を楽しませ、その代わりに無償の食事にありつくのを狙う者のことである[34]。『メナエクムス兄弟』はギリシアの何らかの劇を下敷きにして書かれているから、その作品中でペニクルスに当たる人物が parasitus（ギリシア語では parasitos）と呼ばれており、プラウトゥスがそれをそのままラテン語に移したのであろう。

『メナエクムス兄弟』においてペニクルスは一貫して parasitus として扱われており、プラウトゥスはこれをローマ的なクリエンスとして位置づけ直さなかった。メナエクムスAが先述のクリエンテーラ論の独白を行う直後にペニクルスが登場するにもかかわらず、その両者を関係づけることをしていない。そのため、作品を読んでいてもペニクルスがクリエンスであるという感覚は全く浮かんでこないのである。

この parasitus というものを相良はどのように捉えたのであろうか。parasitus は古代ローマの社会風俗というよりは文学的なキャラクターであるが、興味を引く事柄であるのでここで取り上げてみたい。

ライリー訳は parasitus をそのまま parasite としている（登場人物表もそうなっている）。そして相良はこれをやはり一貫して「幇間」と訳している。相良の使っていた辞書がどんなものかは分からないが、parasite を引いても「幇間」というような意味はなかなか載っていなかったはずである。どうしてこのような適切な訳語を思いついたのであろうか。それは末松謙澄に教えてもらったからだ。末松の「緒言」の中には「パラサイト（幇間の類）」という記述がある（4頁）。末松はケンブリッジで学んでいたときにこうした背景知識を得たのであろう。相良は末松から助言を得たのである。

ペニクルスは、プラウトゥスの他の作品に登場する parasitus たちと比べると、ストックキャラクターとしての parasitus のイメージをあまり強く感じさせない人物である。食事への執着は強調されているが、滑稽な言動はあまり描かれておらず、メナエクムスへの追従よりもむしろ彼に対するシニカルな態度の方が目につく。もちろん、彼はメナエクムスが芸妓のところへ行って食事をするときに同席することになっているから、「遊客の旦那にくっついていく幇間」というイメージが浮かばないわけではない。しかし、「幇間」という訳語については、やはり末松の助言によるところが大きいであろう。そう仮定してみると、相良は登場人物のペニクルスに最初から「幇間」というイメージを重ねて翻訳作業を進めた可能性がある。だが、結局のところ相良がこのペニクルス（須本治）をどのように描いたのかといえば、これをことさら「幇間」的色合いを強めて描いたりはしていない。つまり、滑稽な言動や追従といった特徴が希薄な原典の人物像がうまく再現

されているのである。

奴隷

現実の古代ローマ社会において奴隷とはどのようような存在であったのか、というような大きな問題はさておき、ローマ喜劇において奴隷の登場人物がきわめて重要な働きを果たしていることは否定できない事実である。機転に富んだ奴隷が策略を用いて若主人の恋愛を成就させてやるという筋書きは繰り返し用いられている。また、独白の中で自分を軍隊の司令官や王様になぞらえて自賛するような、大いに得意げな奴隷が出てくることもある。劇の中で奴隷は自分のひどい待遇のことをしょっちゅう口にするけれども、劇中の行動や言葉を見る限り「奴隷」という言葉の持つ陰惨なイメージは喜劇の奴隷たちにはうすい[35]。

『メナエクムス兄弟』のメッセニオはメナエクムス B の奴隷であるが、思慮のある男で、主人が道から外れそうになるのを何とか食い止めようとしている。後半では人違いではあるがメナエクムス A を救い出すし、双子の兄弟が認知し合う場面ではその導き手となっている。とはいえ、他の作品に登場する、主人公として活躍するような奴隷たちと比べると、メッセニオは地味な存在である。主人や目上の人間に対して不遜な態度をとったり、彼らを策略でもって出し抜こうとしたりすることはない。主人のメナエクムスに忠実なきわめて品のいい奴隷という印象を与える。このように、奴隷といっても作品によってその性質は様々であるから、相良がローマ喜劇の奴隷をどのように捉えていたのか、というような大きな問題の立て方はできない。あくまでも『メナエクムス兄弟』の範囲内で、彼が奴隷というものをどう捉えているかを見ることにする。

まず訳語であるが、劇中に現れる servus という言葉に対し相良は「下部」「下男下女」「奴隷」などいくつかの言葉を使っており、中でも「下部」が一番多い。これはライリー訳が servus をたいてい servant と訳しているからであろう。相良が「奴隷」と訳しているところのライリー訳は slave である。一カ所だけ、ライリー訳が slave であるのに相良は「下部」と訳しているところもある（原典 251 行、相良訳 21 頁）。

次に奴隷と主人とのやりとりの箇所から、相良が両者の関係をどのように捉え

ているかを見てみよう。ローマ喜劇の「奴隷」に陰惨なイメージはないとはいえ、主人が奴隷に対して絶対的な権限を持っていることは確かであり、劇中でもそのような絶対的な主従関係を伺わせる箇所はいくつもある。『メナエクムス兄弟』でその最もよい例は226行以下のメナエクムスBとメッセニオのやりとりであろう。最初はまるで友人同士のように会話している二人であるが、メナエクムスの思惑に対して奴隷のメッセニオが嫌味を言うと、メナエクムスは怒って次のように言う。

（原典 249-250 行）MEN. dictum facessas, datum edis, caueas malo./ molestus ne sis, non tuo hoc fiet modo. メナエクムスB：お前は言われたことをやれ。もらったものを食べて、痛い目にあわないよう用心してろ。／僕をいらいらさせるな。このことはお前の思うとおりにはいかないのだ。

原典は韻文のため台詞が簡潔になりがちで、そのせいで言葉が荒っぽく聞こえるということも確かだが、それにしてもかなり一方的な命令口調であり、自分は主人であってメッセニオは最終的には口ごたえできないのだということを強く見せつけている。ところが、これがライリー訳と相良訳になるとかなり調子が変わってしまう。

（ライリー訳）Have done with your witty sayings, and be on your guard against a mischief. Don't you be troublesome; this matter shan't be done at your bidding.

（相良訳 20-21 頁）そふ其方の様に小利口にものを言ふて主人を困らせるものではない、此の事ばかりはどふあつても其方の言ふ通りにすることは成らぬ

台詞の前半部分においてライリー訳が誤っていることと、相良がおおざっぱな訳をしたこともあるが、それにしても相良訳は原典と比べると（ライリー訳と比べても）ひじょうに穏やかな調子に変わってしまっている。また、その直前の部分でも松太郎（メナエクムス）の台詞に「私しも左様思はぬでもないけれど」と

いうような、原典にもライリー訳にもない文言を挿入して、松太郎の物言いをかなり丁寧なものにしている。この箇所についてだけ言えば相良の誤解、誤訳だと言えるかもしれないが、このような穏やかな調子で訳したということは、相良が二人の関係を絶対的な主従関係といったイメージで捉えなかったということを示唆している。

上に述べたように、相良が「奴隷」ではなく「下部」という訳語をもっぱら用いたのは、直接的にはライリー訳が servant であったという事情によるのであるが、原典 251 行のライリー訳にある slave を「下部」と訳していることも考えると、相良にとっては「下部」という言葉が最もメッセニオの立場を表すのにしっくりくる言葉だったのであろう。相良はローマ喜劇における奴隷に関して予備知識を全く持っていなかったであろうが、この作品に描かれている主従関係がきわめて穏健なものだというイメージはつかんだ。相良はときに原典以上に穏健な言葉遣いの訳文でそれを表現したのである。

以上、『雙児の邂逅』という作品について、西洋古典学の研究者の目から見て興味を引かれる事柄を、限られた数ではあるが取り上げて紹介してきた。先に述べたように、本稿では紙数の都合上、文学史的・文化史的背景にはほとんど触れることなく作品を論じざるを得なかった。そのような不十分な分析ではあっても、相良の翻訳が十分に興味深い作品であることは示されたことと思う。しかし、作品の本当の価値は文学史的・文化史的背景の中に置いてみなければ議論できないものである。そのような背景まで考慮に入れてこの『雙児の邂逅』という作品をながめてみるならば、これが当時にあってはきわめて特異な存在であったということが明らかになるであろう。今は予告的にそう述べておくにとどめる。機会が許せば稿を改めてそうした観点からこの作品を捉え直し、本論考を補いたいと考えている。

註

1）抄訳ならば、森田思軒訳『金驢譚』が最も早い。明治 20 年 1 月から 2 月にかけて

郵便報知新聞に連載され、同年5月、他の小篇と合わせて『世界一大奇聞』（中沢順三編、三谷平助出版）として出版された。これは2世紀の作家アプレイウスの小説『黄金のロバ』を大幅にカットして訳出したもので、英語からの重訳である。なお、本邦における西洋古典の受容に関しては渡邊（2001-2002）の歴史年表が最も包括的である。明治期の翻訳文学全般の年表としては川戸他編『明治期翻訳文学総合年表』がある。

2）『明治人名辞典』『大正人名辞典Ⅱ・下巻』による。この人名辞典上の人物が訳者の相良常雄であるという完全な証拠はないが、訳者相良の別の著書である『新編論理学』の奥付に「福岡県平民」とあることや、慶応2年という生年が訳者の学歴などと符合することから、同一人物と見てほぼ間違いないであろう。

3）秦郁彦編『日本近代人物履歴事典』による。

4）この点に着目して彼らの文学活動を描いているのが坪内（2001）であり、当時の文学者たちの動きを知る上で大いに参考になる。

5）秦（2003）p.57参照。

6）長谷川興蔵編『南方熊楠日記』1、p.41.

7）『第一高等中学校一覧』の明治20-21年の冊子を見ることはできなかったが、そもそもこの年度は冊子が発行されなかったようである。

8）晧星社『明治・大正・昭和初期　雑誌記事索引集成　社会科学編』による。

9）末松のケンブリッジでの学業については小山（1999）p.145以下を参照。

10）詳しくは玉江（1992）を参照。

11）筆者のような西洋古典学の研究者にとって興味深いのは、16年11月刊の『希臘古代理学一班』（和装本、発刊は日本）である。序文によれば、これは英日本学生会での講演に基づくものであるという。内容はギリシア哲学史の概説書といったところでそれほど本格的なものではないが、全く専門外の分野でも一書を著してしまう当時の末松のバイタリティーをよく示している。後年にはローマ法に関する訳書や著書も出版している。

12）演劇改良会の概要については、秋庭（1955）p.118以下、小櫃（1988）p.360以下、倉田（1988）p.432以下を参照。

13）小山（1999）p.93以下参照。

14）玉江（1992）p.114以下、小山（1999）p.140以下参照。伊藤博文に宛てた書簡（明治15年5月12日付）の中で末松は、ラテン語、ギリシア語の勉強がたいへんで一時はほとんど絶望したが、何とか辞書を引きながら素読できるくらいにはなったと言っている。

15）坪井の経歴は主に『明治史論集（二）』の年譜（p.433）による。

16）外山の経歴は主に『明治芸術・文学論集』の年譜（p.428）による。

17）菊池大麓に関しては小山（1999）がたいへん詳しい。以下の菊池の留学に関する情報はほとんど本書に基づいている。ちなみに、呉茂一といえば日本における西洋古典学の発展に寄与した最大の人物の一人であるが、彼の父呉秀三は菊池大麓の従兄弟にあたる（二人の母親が姉妹）。

18）添田学士とは添田寿一のことである。添田は明治 17 年に東京大学を卒業後大蔵省に勤めるが、すぐに旧藩主である黒田長成についてケンブリッジに留学し、帰国後は大蔵省の官僚や銀行家として活躍した。小山（1999）pp.153-154 参照。『論理新編』は添田が明治 16 年 8 月に出版したもので、William Stanley Javons の論理学書を翻訳したものである。当時彼は東京大学の学生であり、菊池大麓は前年に『論理略説』を出版しているから、彼も菊池と何らかの交際があったかもしれない。

19）秋庭（1955）p.130 に引かれている『外山正一先生小伝』なる文献には、外山が菊池大麓と親友であったという記述がある。

20）小山（1999）pp.134-140 参照。ちなみに末松と菊池は同年生まれである。

21）会員の完全なリストは小櫃（1988）pp.361-362 に挙げられている。

22）金港堂に関しては小田（2003）pp.48-54 参照。彼によれば金港堂に関するまとまった研究等はないとのことである。

23）柳田泉（1961）pp.127-128 は『雙児の邂逅』に言及している数少ない文献のひとつであるが、柳田も「末松氏の力が大いに与っているらしい」と言っている。なお、柳田は「訳文が如何にもよくこなれていて、なるほど喜劇らしい味がある」と肯定的なコメントも述べている。

24）原作はバーサ・クレイ（Bertha M. Clay）の『ドラ・ソーン』（Dora Thorne）という小説である。バーサ・クレイという筆名に関する特殊な事情に関しては堀（1997, 2000a, 2000b）を参照。末松の翻訳に関しては秋山（1998）p.28 以下も参照。

25）*The comedies of Plautus*, London, 1852. 'Bohn's Library' の一冊である。

26）以下、原典とライリー訳を引用する際は行数で箇所を示し、相良訳は頁数を記す。原典の底本には Lindsay の校訂本を用い、原典に付した日本語訳は岩崎務訳を使わせていただいた。本稿の相良訳の引用は横書きになっているが、原書は当然ながら縦組みである。また、適宜旧字体を新字体に改め、ふりがなは特別な読みのもののみ付している。

27）ペニクルスは元々は牛の尾の毛で作った刷毛の意味で、本当は作品の中でも「スポンジ」ではなくこの意味の方で解すべきである。Gratwic（1993）p.143 参照。

28）Gratwic（1993）p.170 参照。

29）相良訳はもちろん重訳であるが、ライリー訳も原典にかなり忠実な訳である。相良

訳が当時としてはきわめて原文に忠実であったという点に関しては、別稿で論じる予定である。

30）原典688行以下で、話のかみ合わないメナエクムスAに対してエロティウムがついに怒りを爆発させる箇所があるが、その694行に「お金でももって来ないかぎりは、私を意のままにはできないわよ」という台詞がある。これはやはりエロティウムの「お金が第一」という性格を描いているように見える。ライリー訳でもそのように訳されているが、相良はこの文も訳出していない。蛇足ながら、原典のこの箇所にはテクストの別の読みが提案されており（行頭のnisiをmihiに変える）、それに従うと「お金を持ってきても無駄よ。私を自由にはできないわ」という意味になる（Gratwic（1993）p.204）。こちらの読みも説得力のあるものであり、それが正しいとするなら、少なくともプラウトゥス自身はエロティウムを拝金主義者として描こうとはしなかったことになる。

31）他には、103行で美男美女の例えとして引かれているガニュメデス（原文カタメイトゥス）、ウェヌス、アドニスらの名を「業平、田舎源氏の紫と光氏」と訳したり（7頁）、885-886行の医術の神アエスクラピウスとアポロを『史記』に出てくる名医である「扁鵲」と訳したりしている（95頁）。

32）ヘカベ神話の主な典拠は、エウリピデス『ヘカベ』1259以下、キケロ『トゥスクルム荘対談集』3. 63、オウィディウス『変身物語』13. 565以下など。

33）patronusの語は1031-1032行にも出てくるが、相良はこれに訳語を当てることなく文を訳している。

34）parasitusに関する全般的な説明は、Duckworth（1994）pp.265-268を参照。

35）ローマ喜劇における奴隷については、Duckworth（1994）pp.249-253, 288-291を参照。奴隷の立場の向上はプラウトゥスの喜劇の持つ祝祭的な（サトゥルナリア祭的な、と言うべきか）雰囲気、非日常的なトーンによるところが大きいかもしれない。この点に関してはSegal（1987）p.99以下参照。

参考文献

［明治期の著作］

菊池大麓（1882）『論理略説』、同盟舎

坪井九馬三（1883）『論理学講義』、酒井清造出版

_____（1887）『論理学入門』、岩本米太郎出版

相良常雄（1887）『新編論理学』、佐藤乙三郎出版

_____（1888）『雙児の邂逅』、金港堂

_____（1891）『通俗論理学』、其中堂

［年表］

川戸道昭他編（2001）『明治期翻訳文学総合年表』明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》別巻1、大空社

渡邊雅弘編（2001-2002）『日本西洋古典学文献史―切支丹時代から昭和二十年までの著作文献年表―（一）～（三）』、愛知教育大学、（次の文献を再編したもの：「日本におけるギリシァ学・ローマ学の流入・移植・受容と展開の文献史（一）～（五）：切支丹時代から昭和二十年までの著作文献年表」、『社会科学論集』35-39、愛知学芸大学法経社教室、1996-2001）

［事典・レファレンス］

『明治人名辞典』、日本図書センター、1987（底本：『現代人名辞典』第二版、中央通信社、大正元年）

『大正人名辞典Ⅱ・下巻』、日本図書センター、1989（底本：『大衆人事録　昭和三年版』、帝国秘密探偵社、昭和二年）

秦郁彦編（2002）『日本近代人物履歴事典』、東京大学出版会

『明治・大正・昭和初期　雑誌記事索引集成　社会科学編』、晧星社、1994

［研究書など］

秋庭太郎（1955）『日本新劇史　上巻』、理想社

秋山勇造（1998）『埋もれた翻訳』、新読書社

岩崎務訳（2001）『メナエクムス兄弟』、『プラウトゥス　ローマ喜劇集 2』所収、京都大学学術出版会

小田光雄（2003）『書店の近代』、平凡社新書

倉田喜弘編（1988）『芸能』日本近代思想体系 18、岩波書店

小櫃万津男（1988）『日本新劇理念史　明治前期篇』、白水社

小山　騰（1999）『破天荒〈明治留学生〉列伝』、講談社選書メチエ

玉江彦太郎（1992）『若き日の末松謙澄・在英通信』、海鳥社

坪内祐三（2001）『慶応三年生まれ七人の旋毛曲り』、マガジンハウス

長谷川興蔵編（1987-89）『南方熊楠日記』1-4、八坂書房

秦　郁彦（2003）『旧制高校物語』、文春新書

土方定一編（1975）『明治芸術・文学論集』明治文学全集 79、筑摩書房

堀　啓子（1997）「尾崎紅葉「不言不語」と原作者 Bertha M. Clay」、『文学』1997 年春号、

岩波書店、pp.109-119
_____（2000a）「『谷間の姫百合』試論—Bertha M. Clay を藍本として」、『北里大学一般教育紀要』5、pp.117-106
_____（2000b）「「金色夜叉」の藍本—Bertha M. Clay をめぐって」、『文学』2000 年 11・12 月号、岩波書店、pp.188-201
松島榮一編（1976）『明治史論集（二）』明治文学全集 78、筑摩書房
柳田泉（1961）『明治初期翻訳文学の研究』、春秋社
Duckworth, G.E.（1994）*The Nature of Roman Comedy* second edition, Bristol Classical Press,（[1]1952）.
Gratwic, A.S.（1993）*Plautus Menaechmi*, Cambridge U.P.
Lindsay, W.M. ed.（1904）*T. Macci Plauti Comoediae* Tomus I, Oxford,（repr.1910）.
Segal, E.（1987）*Roman Laughter* second edition, Oxford U.P.,（[1]1968）.

〈キーワード〉西洋古典，翻訳文学，プラウトゥス，相良常雄，末松謙澄

Plautus in the Meiji Period

—On a Translation of *Menaechmi* by Tsuneo Sagara—

Masahiro GONOJI

Tsuneo Sagara's *Futago no Deai* (Encounter of the twin-brothers) is a translation of *Menaechmi*, a Roman comedy by Plautus. While it is the first complete translation of western classical literature in Japan, it was not translated from the Latin original, but from an English translation. The translator, Sagara, is a dim figure in the history of Japanese literature. In the first chapter of this paper, I present information about his background and career from several sources. It is revealed, for example, that he was a contemporary of Soseki Natsume and Shiki Masaoka at high school in Tokyo, and that he did not go on to university, but instead entered the world of official bureaucracy and business.

Sagara published two books during his high school days, *Futago no Deai* and *Shinpen Ronrigaku* (A New Compilation of Logic). Both works contain a preface by Kencho Suematsu, who is known for having played an active part in both politics and culture in the Meiji period. According to the preface, it was Suematsu who recommended that Sagara translate *Menaechmi*, which he had read during his school days at the University of Cambridge.

However, it is not clear how Sagara and Suematsu got acquainted. In the second chapter I examine the relationships between four historical figures, Kencho Suematsu, Masakazu Toyama, Dairoku Kikuchi, and Kumezo Tsuboi, the last of whom suggested to Sagara that he should write *Shinpen Ronrigaku*. And, based on this investigation, a supposition regarding the formation of their acquaintanceship is given.

In the third and last chapter, a comparison is given between *Futago no Deai*, the Plautine original, and the English translation by H. T. Riley that Sagara used for his translation. The points of comparison and analysis are as follows: Sagara's translation of Roman (or Greek) things into a Japanese setting, such as proper names and Greek mythology; his treatment of difficult places in the text for liter-

al translation; his comprehension of peculiarly Roman matters, such as *clientela*, parasite and slavery.